

1	.	与	え	ら	れ	た	品	質	上	の	目	標															
1	.	1		プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	概	要																
	私	は	、	都	内	に	あ	る	社	員	数	1000	名	規	模	の	シ	ス	テ	ム	イ	ン	テ	グ			
	レ	ー	タ	に	、	20	年	勤	務	し	10	年	前	か	ら	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	マ	ネ	ー	ジ		
	ヤ	ー	と	し	て	従	事	し	て	い	る	。															
	私	は	、	一	昨	年	よ	り	大	手	生	命	保	険	会	社	で	あ	る	A	社	の	シ	ス			
	テ	ム	開	発	を	担	当	し	て	い	た	関	係	で	、	A	社	の	法	人	営	業	部	が	企		
	画	し	た	営	業	管	理	シ	ス	テ	ム	へ	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	マ	ネ	ー	ジ	ヤ	と	し		
	て	参	画	す	る	こ	と	に	な	っ	た	。	こ	の	営	業	管	理	シ	ス	テ	ム	は	、	今		
	ま	で	営	業	担	当	者	が	顧	客	と	折	衝	し	た	内	容	を	紙	ベ	ー	ス	の	報	告		
	書	で	上	司	に	報	告	し	て	い	た	仕	組	み	を	、	W	e	b	ア	プ	リ	ケ	ー	シ		
	ョ	ン	と	し	て	、	電	子	化	し	て	承	認	・	リ	サ	イ	ク	ル	、	全	文	検	索	と		
	い	っ	た	機	能	に	よ	り	報	告	内	容	の	有	効	活	用	を	目	的	と	し	て	、	企		
	画	さ	れ	た	も	の	で	あ	る	。																	
	こ	の	営	業	管	理	シ	ス	テ	ム	は	、	A	社	の	創	立	100	周	年	に	あ	た	る			
	来	年	4	月	カ	ッ	ト	オ	ー	バ	ー	が	絶	対	条	件	と	さ	れ	、	私	の	会	社	の		

ト	ッ	プ	も	、	こ	の	営	業	管	理	シ	ス	テ	ム	の	成	功	を	本	年	度	の	最	重	
要	課	題	と	し	て	位	置	づ	け	ら	れ	て	い	た	。										
1	.	2		与	え	ら	れ	た	品	質	上	の	目	標											
	法	人	営	業	部	の	シ	ス	テ	ム	担	当	者	か	ら	、	同	営	業	部	は	他	の	部	
署	に	比	べ	年	配	者	が	多	く	、	PC	の	操	作	や	知	識	が	あ	ま	り	高	く	な	
い	と	言	っ	た	特	徴	を	、	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	立	ち	上	げ	の	際	に	聞	い	て	
い	た	。	私	は	、	こ	の	特	徴	か	ら	下	記	の	よ	う	な	品	質	上	の	目	標	を	
立	て	た	。																						
(1)	操	作	性																						
	今	ま	で	紙	で	報	告	書	を	記	入	し	て	い	た	営	業	担	当	者	、	そ	れ	も	
PC	に	不	案	内	な	ユ	ー	ザ	が	、	報	告	書	の	入	力	に	困	ら	な	い	操	作	性	
の	提	供	を	品	質	上	の	目	標	と	し	た	。	具	体	的	に	は	、	マ	ニ	ュ	ア	ル	
な	し	で	も	、	日	々	の	報	告	書	を	入	力	で	き	る	こ	と	を	目	指	し	た	。	
(2)	レ	ス	ポ	ン	ス																				
	PC	や	シ	ス	テ	ム	に	不	案	内	な	ユ	ー	ザ	に	、	レ	ス	ポ	ン	ス	の	悪	さ	
は	シ	ス	テ	ム	に	対	し	て	敬	遠	に	繋	が	る	た	め	、	レ	ス	ポ	ン	ス	を	重	

氏名：

問：平成19年度 問3 設問ア

3/3

視	し	、	レ	ス	ポ	ン	ス	時	間	を	最	長	5	秒	と	す	る	目	標	を	設	定	し	た	。	

2	.	品	質	目	標	達	成	の	た	め	の	活	動	計	画												
2	.	1		与	え	ら	れ	た	制	約																	
		本	シ	ス	テ	ム	開	発	に	当	た	り	、	利	用	す	る	W	e	b	ア	プ	リ	ケ	ー		
		シ	ョ	ン	・	エ	ン	ジ	ン	に	関	し	て	、	私	の	所	属	す	る	部	署	で	は	利	用	
		経	験	の	あ	る	メ	ン	バ	ー	が	い	な	か	っ	た	。	そ	の	た	め	、	他	部	署	か	
		ら	過	去	に	利	用	経	験	が	あ	り	、	私	の	会	社	の	中	で	技	術	面	で	の	キ	
		一	パ	ー	ソ	ン	で	あ	る	B	氏	を	参	画	さ	せ	る	べ	く	調	整	を	行	っ	た	。	
		し	か	し	、	他	の	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	の	都	合	に	よ	り	、	外	部	設	計	が	終	
		了	す	る	直	前	の	6	月	ま	で	の	制	限	つ	き	の	参	画	と	な	っ	た	。			
		私	は	、	B	氏	が	い	る	6	月	末	ま	で	に	、	技	術	的	ノ	ウ	ハ	ウ	を	メ		
		ン	バ	ー	に	教	授	さ	せ	る	こ	と	と	、	併	せ	て	B	氏	と	の	協	力	に	よ	り	、
		品	質	を	作	り	こ	む	プ	ロ	セ	ス	と	品	質	を	確	認	す	る	プ	ロ	セ	ス	の	活	
		動	計	画	の	策	定	を	行	っ	た	。															
2	.	2																									
(1)		デ	ザ	イ	ン	と	ロ	ジ	ッ	ク	の	分	離														
		プ	ロ	ト	タ	イ	プ	を	元	に	画	面	レ	イ	ア	ウ	ト	や	操	作	に	つ	い	て	、		

ユ	ー	ザ	と	確	認	を	行	う	作	業	の	中	で	、	課	毎	に	異	な	る	デ	ザ	イ	ン
や	操	作	を	要	求	さ	れ	た	。	私	は	、	後	の	工	程	で	デ	ザ	イ	ン	や	操	作
に	関	す	る	仕	様	変	更	が	あ	る	兆	候	と	し	て	捕	ら	え	、	設	計	方	針	と
し	て	、	デ	ザ	イ	ン	と	ロ	ジ	ッ	ク	を	分	離	し	て	行	う	こ	と	を	メ	ン	バ
ー	に	説	明	し	決	定	し	た	。															
(2)	プ	ロ	タ	イ	プ	に	よ	る	レ	ス	ポ	ン	ス	測	定									
	B	氏	が	前	の	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	で	策	定	し	た	W	e	b	ア	プ	リ	ケ	ー
シ	ョ	ン	用	コ	ー	デ	ィ	ン	グ	ル	ー	ル	に	て	、	プ	ロ	ト	タ	イ	プ	を	作	成
し	、	こ	の	プ	ロ	ト	タ	イ	プ	に	対	し	て	性	能	上	の	測	定	を	行	い	、	期
待	す	る	レ	ス	ポ	ン	ス	値	と	な	る	か	を	予	想	す	る	工	程	を	内	部	設	計
の	後	に	計	画	し	た	。																	
	実	績	あ	る	コ	ー	デ	ィ	ン	グ	ル	ー	ル	に	よ	り	、	手	探	り	で	の	開	発
に	よ	る	不	安	感	を	払	拭	し	、	前	の	工	程	に	戻	る	と	い	う	リ	ス	ク	を
な	く	す	こ	と	を	目	的	と	し	た	。													
2	.	3		品	質	を	確	認	す	る	プ	ロ	セ	ス										
(1)	負	荷	ツ	ー	ル	の	利	用																

	本	シ	ス	テ	ム	の	利	用	に	関	す	る	特	徴	と	し	て	、	報	告	書	を	入	力
す	る	ピ	ー	ク	は	、	朝	出	社	し	て	か	ら	の	1	時	間	以	内	で	あ	る	こ	と
が	ユ	ー	ザ	ヒ	ア	リ	ン	グ	に	よ	り	確	認	さ	れ	た	。	こ	の	時	間	帯	は	、
メ	ー	ル	の	チ	ェ	ッ	ク	や	他	業	務	で	の	ト	ラ	フ	ィ	ッ	ク	も	多	く	、	こ
の	時	間	帯	で	の	レ	ス	ポ	ン	ス	が	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	の	計	画	段	階	で	一
番	懸	念	さ	れ	た	。																		
	こ	の	負	荷	状	態	で	の	テ	ス	ト	を	行	う	た	め	、	負	荷	ツ	ー	ル	を	総
合	テ	ス	ト	で	採	用	す	る	こ	と	に	し	、	購	入	に	向	け	た	選	定	の	際	に
は	、	今	後	立	ち	上	が	る	同	種	の	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	で	も	利	用	で	き	る
も	の	を	選	定	し	、	そ	の	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	の	た	め	に	構	築	方	法	や	パ
ラ	メ	ー	タ	を	詳	細	に	記	録	す	る	計	画	を	盛	り	込	ん	だ	。				
(2)	運	用	テ	ス	ト	の	前	倒	し															
	ユ	ー	ザ	に	操	作	性	や	レ	ス	ポ	ン	ス	を	確	認	し	て	貰	う	為	運	用	テ
ス	ト	を	ス	ケ	ジ	ュ	ー	ル	す	る	際	に	、	テ	ス	ト	を	実	施	す	る	メ	ン	バ
一	に	、	実	際	に	PC	を	操	作	す	る	営	業	担	当	者	を	参	画	す	る	様	に	ユ
一	ザ	に	要	請	し	た	。	ま	た	、	こ	の	運	用	テ	ス	ト	を	充	実	さ	せ	る	た

め	、	少	し	で	も	長	い	期	間	を	当	て	ら	れ	る	様	に	、	運	用	テ	ス	ト	の		
開	始	を	総	合	テ	ス	ト	が	終	了	す	る	前	の	途	中	の	段	階	か	ら	と	し	た	。	
	こ	の	計	画	の	た	め	に	、	総	合	テ	ス	ト	の	計	画	の	段	階	で	、	総	合		
テ	ス	ト	で	実	施	す	る	テ	ス	ト	の	順	序	を	、	運	用	テ	ス	ト	で	十	分	確		
認	し	て	欲	し	い	項	目	を	先	に	確	認	す	る	工	夫	を	テ	ス	ト	担	当	者	に		
指	示	し	た	。																						
	こ	の	運	用	テ	ス	ト	で	指	摘	さ	れ	た	内	容	は	、	運	用	テ	ス	ト	後	に		
設	け	た	改	修	期	間	で	対	応	す	る	様	に	計	画	し	た	。	ユ	ー	ザ	と	は	予		
め	運	用	テ	ス	ト	で	の	指	摘	に	つ	い	て	は	、	優	先	度	の	高	い	も	の	か		
ら	2	週	間	で	対	応	可	能	な	も	の	を	限	定	し	て	、	対	応	す	る	こ	と	を		
事	前	に	了	解	を	得	る	こ	と	に	し	た	。													
3	。	評	価	と	評	価																				
3	。	1		評	価																					
	営	業	管	理	シ	ス	テ	ム	は	、	絶	対	条	件	の	納	期	ど	お	り	完	成	さ	せ	、	
無	事	に	4	月	に	カ	ッ	ト	オ	ー	バ	ー	を	向	え	た	。	法	人	営	業	部	の	役		
員	か	ら	は	、	使	い	勝	手	の	良	い	シ	ス	テ	ム	で	あ	る	と	の	評	価	を	い		

た	だ	い	た	。																				
カ	ッ	ト	オ	ー	バ	ー	後	に	行	っ	た	ユ	ー	ザ	ア	ン	ケ	ー	ト	で	は	、	い	く
つ	か	の	改	善	要	望	は	上	が	っ	た	も	の	の	、	品	質	に	関	す	る	不	満	な
ど	は	な	か	っ	た	。	ア	ン	ケ	ー	ト	の	各	項	目	に	算	出	し	た	満	足	点	で
は	、	80	点	を	超	え	、	私	の	会	社	の	メ	ト	リ	ク	ス	で	は	、	“	ほ	ぼ	満
足	”	を	示	す	値	で	あ	っ	た	。														
3	.	2		改	善	点																		
	私	の	会	社	で	は	、	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	運	営	の	た	め	に	「	開	発	標	
準	」	を	定	め	、	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	マ	ネ	ー	ジ	ャ	を	含	め	全	員	に	、	こ
の	ル	ー	ル	の	遵	守	を	し	て	い	る	。	し	か	し	、	今	回	の	営	業	管	理	シ
ス	テ	ム	な	ど	の	ユ	ー	ザ	の	特	徴	を	考	慮	し	た	品	質	計	画	は	、	部	署
を	超	え	て	共	有	す	べ	き	で	あ	る	と	考	え	る	。								
	私	は	、	今	後	こ	う	言	っ	た	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	事	例	を	、	成	功	し	た
も	の	／	失	敗	し	も	の	全	て	を	デ	ー	タ	ベ	ー	ス	化	し	、	今	後	の	プ	ロ
ジ	ェ	ク	ト	運	営	に	役	立	て	た	い	と	思	う	。									
一	以	上	一																					

論文添削結果

2008.08.26 (株) テレコムリサーチ
添削者：佐藤 創

【添削情報】

論文提出者：●●●●●様
問題 : H 1 9 年度 問 3

【免責事項・その他】

本添削結果は、添削者個人の判断によるものであり、所属する会社や組織を代表する意見ではございません。また、本添削結果に即したからといって試験の合格を保証するものではありません。本添削結果の使用の結果生ずるあらゆる損害や被害について添削者は免責されるものとします。本添削結果の著作権は添削者に帰属します。

[目次]

1. 論文見出し構成の例
2. 論述すべき内容
3. 添削結果
4. 講評
 - (1) 添削結果の根拠について
 - (2) 講評の詳細
5. 今後の学習に関するコメント

1. 論文見出し構成の例

以下に添削者が考える、本問題の見出し構成の例を示します。

1. 私が携わったプロジェクトの概要
 1. 1 プロジェクト概要
 1. 2 与えられた品質上の目標
2. 品質確保のための活動計画
 2. 1 プロジェクトの制約条件
 2. 2 品質確保のための活動計画
 - (1) 品質を作りこむためのプロセス
 - (2) 品質を確認するためのプロセス
3. 評価と今後の改善点
 3. 1 活動計画の評価
 3. 2 今後の改善点

2. 論述すべき内容

以下に添削者が考える、問題文から読み取れる題意と、求められる論述内容について、1. 論文見出し構成例に沿って示します。

見出し	論述すべき内容	備考
1. 1	プロジェクトの特徴、あなたの立場、求められる要件などを明記。 <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト概要、プロジェクト体制 ・工期、工数、契約内容、担当工程など ・あなたの立場・役割 ・プロジェクトの制約事項・条件など ⇒今回の論文では、品質目標や予算・納期などの制約条件は、1. 2 以降に記述が求められているため、ここでは詳細に記述する必要は無い。記述するにしても概要や、伏線程度にとどめておく。	本論文では、計画プロセスのみを論じる。実行プロセスは論じない。論じるとしても3. 項の評価にて、計画を実行した結果の顛末を簡潔に記載する程度である。
1. 2	①プロジェクトに与えられた品質目標を具体的に記述すること ⇒信頼性、性能、操作性などの品質目標を具体的に記述すること。また品質目標が設定された背景（理由）についても記述を行う。	
2. 1	①プロジェクトの制約条件を具体的に記述すること ⇒品質保障計画を策定する際の制約条件となる、予算・納期、及びその他プロジェクト特性について具体的な記述を行う。なぜ制約条件が発生したかの背景（理由）も合わせて記述する。また、後に記述する品質保証計画の内容と、制約条件の内容が矛盾してはいけない。	2章は比較的論述の自由度が高いため、何でも書けそうだと思います。しかし、こうした問題こそ、問題文の題意に沿った論述を心がける必要がある。
2. 2	①品質保証計画策定についてポイントをはずさない記述をする ⇒問題文では、「品質を作りこむためのプロセス」、「品質を確認するためのプロセス」と抽象的に記述がされているが、これは具体的には開発工程とテスト工程に対応する。このなかで、開発及びレビュー・プロセス、及びテスト・プロセスの設計についての論述が特に求められている。 ②品質目標、制約条件、品質保証計画の3つが矛盾無く論述されていること	

	⇒制約条件に起因した、品質目標を達成する上での問題を解決できる品質保証計画を論述すること。特に、プロジェクトマネージャの視点での創意工夫や考えが十分に盛り込まれた論述が求められる。	
3. 1	・品質保証計画の実行結果の簡単な顛末と、評価すべき点について記述すること。	
3. 2	・課題や対応策に関連する改善点を記述すること。	

本問は品質管理の計画プロセスに関して問われていますが、記載すべき内容の自由度が比較的大きいと思います。自由度が大きい分だけ、実務経験が豊富な人ほど書きやすい問題だと思います。しかし逆を言えば経験が少ない人ほど、題意を捉えにくい問題でもあります。特に、問題文にある「品質を作りこむためのプロセス」と「品質を確認するためのプロセス」という言葉に対して、すぐに具体的なプロセスが思い浮かばないようであれば、この問題は選択できないと考えます。

また、品質目標以外のプロジェクトの制約条件についても、具体的な論述が必要です。そして、その制約条件を十分に理解し、その影響を少なくするような工夫を盛り込んで、品質保証計画を策定するストーリー展開を論じる必要があります。

3. 添削結果

添削者が考える論文評価結果を、A～Dランクに分けて示します。合格はAランクのみです。

評価ランク	内容	判定
C	内容が不十分である	不合格

※A～Dランクの評価内容は以下の通りです。

- A：合格水準にある
- B：合格水準にあと一步である
- C：内容が不十分である
- D：出題の要求から著しく逸脱している

4. 講評

添削者が考える講評について示します。

(1) 添削結果の根拠について

評価ランクがCである理由は以下です。

- ①論述で求められている題意をはずしている
 - ①-1 品質目標、制約条件、計画作成上の工夫、の3つの要素が関連づいていない
 - ①-2 論じているプロジェクトマネジメント・プロセスが異なっている
- ②プロジェクトマネージャとしての考えや根拠の記述が不足している
- ③文章表現上、不適切な箇所がある

以下にそれぞれについて説明をさせていただきます。

(2) 講評の詳細

①論述で求められている題意をはずしている

①-1 品質目標、制約条件、計画作成上の工夫、の3つの要素が関連づいていない

本指摘は、前回させていただいた指摘と同じものです。品質目標、制約条件、計画作成上の工夫のすべてが記述されてはいますが、その関連が取れていません。

品質目標、制約条件、計画作成上の工夫、の3つの要素が関連づいていない箇所について以下に示します

(ア)

「2. 2」において、デザインとロジックの分離について記載されておりますが、この施策によってどんな品質を確保できるのか、また制約条件への対応がどのようになされているのかが読み取れません。

品質目標は「操作性」と「レスポンス」をあげていますが、これらのどの品質目標を達成するための施策なのでしょう。また、どんな効果があり、制約条件をいかに工夫して乗り越えているのでしょうか。

これら関連性が見当たらないため、プロジェクトマネージャとして効果的な施策を打っ

たと判断できません。

(イ)

「2. 2」において、プロトタイプによるレスポンス測定が記載されておりますが、この施策は、制約条件をどのように乗り越えたか、その工夫について言及されていません。制約条件が無視されており、制約条件をクリアするための工夫がないために、効果的な施策であったと判断できません。

(ウ)

「2. 3 品質を確保するプロセス」において、負荷ツールの利用について記述されていますが、制約条件との関連性が伺えません。

①-2 論じているプロジェクトマネジメント・プロセスが異なっている

これも前回指摘させていただいた内容と同じです。計画プロセスの論述を行うことが求められていますが、実行プロセスの論述が含まれています。

「2. 2」のデザインとロジックの分離の記述は、ユーザとの相互確認（レビュー）を行った中で発生した課題であり、計画プロセスの論述となっております。本問題は、事前にプロジェクトの制約条件や課題を読んで（推測して）、いかに実行可能でかつ効果的な計画を策定できるか、その経験や考えを問うものです。プロジェクトを進めてみてはじめてわかった課題にどう対処したかを論じる問題ではありません。

②プロジェクトマネージャとしての考えや根拠の記述が不足している

小論文は、プロジェクトマネージャとしての能力を評価するためのものです。よって、プロジェクトマネージャとしてどのような考えを持ち、問題や課題に対していかに創意工夫し、適切に対処したのかが評価されます。しかし、本論文ではプロジェクトマネージャとして行動した結果は記述されていますが、その結論に至るまでの考えや判断が抜けている箇所が多く、淡々とした日記を読んでいるような印象を受けます。

プロトタイプによるレスポンス測定や、負荷ツールによるピーク負荷耐性の試験にしても、品質目標や制約条件から、どのような目標を達成するために、どんな課題やリスクが想定され、そのためにどのようなリスク対応策を打てば、どのような効果が得られる、というような理論的に理解しやすい構成になっていません。プロジェクトマネージャとして、どのように物事を考え、判断したのかをもっと記述する必要があります。

レスポンス測定について、これらの内容を含めた一例を示します。

品質目標として掲げたレスポンスを達成するには、処理速度を意識したコーディングを徹底することが重要である。私の過去の経験上、製造工程がすべて完了してからレスポンスを向上させるために手直しをした場合、すでにコードが組みあがっていることで大きな修正ができないため、レスポンスを向上させるのが困難であると考えているからだ。また、コードの修正に伴うリグレッションテストの工数が膨大になるため、進捗にも悪影響を及ぼす。

このため処理速度が必要とされる機能では、レスポンスを確保できるコーディング・ルールを定め、これに準拠したコーディングを行うことで品質目標を達成しようと考えた。

また製造工程に先立ち、コーディング・ルールに基づいて作成したプログラムのレスポンスを計測しようと考えた。処理速度が求められる機能のプロトタイプをコーディング・ルールに則って作成し、そのレスポンス計測を行う。これによって品質が確保されれば、レスポンスが確保できないために発生する手戻り作業を削減できるからだ。

なおコーディング・ルールの策定は、Web 経験が豊富な B 氏に協力を要請し、B 氏が参画可能な期間のうちにプロトタイプのリスポンス計測を実施できるようにスケジュールを立てた。

上記はあくまでも一例ですが、プロトタイプによるレスポンス測定を行うための背景や、プロジェクトマネージャとしての考えや判断が明確に読み取れるようになっていると考えます。

レスポンス測定にしても、文脈をよく読めば暗にそういった内容を示唆した文章になっていることは読み取れなくはありません。しかし論文である以上、行間を読ませるのではなく、明示的に文章にすることが必要です。そうすれば具体性や説得力がある論文になると考えます。

③文章表現上、不適切な箇所がある

(ア) 文章表現が不適切な箇所がある

原文と、修正例を示します（あくまでも修正例です）。赤字箇所を差分を示します。

・ P 1、18 行目

原文：この営業管理システムは、A社の創立100周年にあたる来年4月カットオーバーが絶対条件とされ、私の会社のトップも、この営業管理システムの成功を本年度の最重要課題として位置づけられていた。

修正：この営業管理システムは、A社の創立100周年にあたる来年4月カットオーバーが絶対条件とされた。これを受け、私の会社のトップも、この営業管理システムの成功を本年度の最重要課題として位置づけた。

※原文の「～位置づけられていた」の語尾が不適切です。前回は指摘させていただきましたが、1文が長くなる傾向が顕著です。長くなると主語に対する語尾が不一致になる傾向が強くなります。修正文では、この1文を途中で区切ってみました。これによって歯切れの良い文章になりますので、今後意識していただければと思います。

1文が長いので複数の文に分割したほうが読みやすいと思う箇所を挙げます。

- ・ 1 ページ 11 行目から、17 行目までの文。
- ・ 1 ページ 18 行目から、2 ページの 2 行目までの文。
- ・ 2 ページ 17 行目から、20 行目までの文。
- ・ 3 ページ 12 行目から、16 行目までの文。
- ・ 4 ページ 7 行目から、12 行目までの文。
- ・ 5 ページ 6 行目から、11 行目までの文。
- ・ 5 ページ 13 行目から、17 行目までの文。

(イ) 論述で求められる内容とは関連の少ない内容を記述している

本来論じるべき内容とはあまり関連のない記述をしている箇所がいくつかありました。

題意とはあまり関係の無いことであるため、こうした記述によって評価が高くなることは無いと考えられます。むしろ場合によっては、評価が低くなる可能性もあります。いずれにせよ、題意とは関連のない内容は記載しないほうが良いと思います。

- ・ 5 ページ 7 行目以降の内容

「購入に向けた選定の際には、今後立ち上がる同種のプロジェクトでも利用できるものを選定し、そのプロジェクトのために構築方法やパラメータを詳細に記録する計画を盛り込んだ。」

→今後のプロジェクトへの適用については問われておらず、また、品質・制約条件のいずれにも関連性がない工夫を論じていることになる。

- ・ 6 ページ 5 行目以降の内容

「この運用テストで指摘された内容は、運用テスト後に設けた改修期間で対応する様に計画した。ユーザとは予め運用テストでの指摘については、優先度の高いものから 2 週間で対応可能なものを限定して、対応することを事前に了解を得ることにした。」

→内容が、品質・制約条件のいずれにも関連していないため、不要な論述ではないかと思えます。

5. 今後の学習に関するコメント

今後の学習の方向性についてコメントさせていただきます。

論文全体から受ける印象としては、1つ1つの節が全体を通じて統一されていないように思えます。おそらく、品質目標・制約条件・計画策定上の工夫の3つがうまく結合していないのが原因の1つだと考えられます。もう1つの原因としては、行動の結末に至るまでの考えや背景の論述が少ないためだと考えられます。この点については、いずれも「4. 講評」にて指摘させていただいております。

もうすこしだけ、緻密に論述内容を組み立ててみてはいかがでしょうか。今回指摘させていただいた内容は、論文のストーリーを構築する時点で留意しなければならない内容です。

もしかすると当方の指摘は、本試験の評価と比較しても厳しいほうなのかもしれません。しかし、実際に私自身が心がけて論述し、合格した経験から判断すると、今回のような指摘が非常に重要だと考えています。

以上